

太古の記憶というか……
ずっと繋がっている感覚を描きたい
——原田圭



お椀雨 2012年
91×116.7cm パネル、石膏地、卵テンペラ
第47回昭和会展松村謙三賞受賞作品
「畑でスケッチしていた時に、スプリンクラーや、畑の作物から感じたものを作品にしました。目隠しているのは、畑にかかっていた霜よけの不織布から連想しました（原田）」

歩行フキ 2012年 97×130.3cm
パネル、石膏地、卵テンペラ
第66回二紀展二紀賞受賞作品
「東北芸工大での修了制作作品の一つです。フキの葉脈や全体の形状が気に入ってスケッチしている中から、植物と人間を逆転させてみようと考えた作品にしました（原田）」



はらだ・けい
1987年山形県生まれ。2010年二紀展入選。11年第65回二紀展奨励賞。12年第47回昭和会展松村謙三賞受賞。同年、東北芸術工科大学大学院修了、東京藝術大学大学院に進学。第66回二紀展二紀賞受賞。

初めて原田さんの作品を見たときは、ずいぶん不思議な、奇妙な絵だなあと思いましたよ。木原（正徳）さん（注・原田が

「やっぱりこの子は天才だな！」

松村 先日、二紀展で彼女の作品を観た瞬間、息をのむような、いや、凄く不思議な感じを受けた。この子は、やっぱり天才だな！ 周りにたくさん作品が並んでいたけれど、他の絵が目に入らなかった。思わず、山本先生に「これ、買いますよ！」って言ってしまいました。絵から彼女の不思議な魂が出てくる感じだね、なんて言うかな？ 内なるものが違う！ 他の作家だとモチーフが同じ作品だと受ける印象も似た感じだが、原田さんの作品は、モチーフが同じようでも、受ける印象がまるで違うんだな！

山本 松村社長が（二紀展の）会場に来られたのは初日の早い時間で、まだ受賞の札もついていないときでしたね。社長が気に入った絵が、たまたま二紀賞をとることになった。得票数は最多でした。

この受賞はつまり、二紀会の審査員たちが支持したということもあり、これをもって自動的に準会員になります。（昭和会展を主宰している）日動画廊でも広く見てもらえる場に到達できたわけですから、24歳にして非常に順調なペース。期待値が高い分、今後は大変かもね。



第47回昭和会展松村謙三賞受賞作品《お椀雨》の前で。右から洋画家・山本貞、作家、ブリヴェ企業再生グループ社長・松村謙三、美術評論家・南畠宏の各氏

第47回展
「松村謙三賞」
第66回展
「二紀賞」

原田圭

巨匠への第一歩
昭和会展・最新世代の魅力——特別編

撮影・船香剛
本文構成・丸山かおり
取材協力・吉兆西洋店

本企画が連載化される前に、第47回の昭和会展松村健三賞受賞作家として2012年8月号の座談会に登場した原田圭さん。昨秋、間髪いれずに第66回「二紀展」にて、一般出品の最高賞である「二紀賞」を受賞。その才能がいよいよ本格的に輝きを放とうとしている。

そこで今回、特別編として再登場のリクエストに応じてもらった。彼女が最新のポートフォリオを開くと、コレクター、画家、評論家、と立場の違う3氏が目を輝かせて見入っていた。

【ホスト】

松村謙三（ブリヴェ企業再生グループ代表取締役社長、大阪大学 知的財産センター招聘教授）

山本貞（洋画家・日本芸術院会員）

南畠宏（美術評論家・女子美術大学教授）

草地の記憶 2010年 140x274.5cm パネル、白亜地、卵テンペラ
ポートフォリオの中で一同が絶賛した作品「スケッチをしばじめて間もなくのころ。小さな植物が群生する場所で『震え』のようなものを感じて、それを作品化しました（原田）。『震え』とは植物と自身との共振のようなものを原田流に表した言葉



どんな研究にも先んじて 植物の声が聞けている感じ



やまもと てい
洋画家。現在、日本芸術院会員、
二紀会理事長、日本美術家連盟
常任理事。1934年東京都生まれ。
58年武蔵野美術学校卒業。72年
の第8回昭和会展での優秀賞作家
でもある

原田 それと、この「卵を使う」っていうことに、入口というかスイッチというか……そういうものを感じているところがあって。いろいろ不便だけど、自分自身でもかなりそこに気持ち

原田 ……木原先生、そんなことおっしゃられていたんですか！
山本 二紀会でも、3年前の最初の出品のときなんか、審査員たちはどう解釈したらいいのかわからなかったみたいなんです。でもだんだんと、「原田ワールド」にひきこまれた。
大きな絵でも構造的に下図を描いてトレースして、という感じがなくて、植物と人間のかたち自然に重なっていますよね。これは僕の想像だけど、東北・山形という、彼女が生まれ育った土地の風土から自然と出てきたような、あの意味で僕たち農耕民族を代表するような表現だから、てらいがない。現代とは何か、近代とは何か、なんていう考えではなくて、ごく自然に先祖からの流れ、植物に囲まれた環境とのつきあいから生まれてきた表現になっている。だからすぐに面白く受け入れられた。新しい世代の絵としては珍しいのかもしれない。
南 原 (ポートフォリオを参照しながら) 彼女はちよつと特別ですね。絵を描くことが好きでう入口から、つながりを描いているというか。原田 はい、少し前まで、言葉にするときは「震え」言っていたんですが。人間同士であれば話をしたりして繋がっていくように、深く掘っていくと人間と植物という違うもの同士でも下のほうで繋がれるものがあるんじゃないかと。植物をメインに描きたいわけじゃなくて太古の記憶みたいなものや、もつとすごく昔の、すごく奥にあるものをどうにかしたい。それがずつと繋がっているっていう感覚を、画面にと

松村 花とか植物とか、そういった形状にとらわれて描いているわけじゃない、それが作品の不思議さに繋がっているんですね。私ははてつきり彼女が植物と話をしようとしているのかな、植物が友だちなのかな、と思っていたんだけど。友達いる？ いるならなお不思議だなあ。(笑)。
原田 い、います、大丈夫です！(笑)
テンペラとの出会い
——ところで、素材であるテンペラとの出会いは、どういう経緯でしたか。
原田 (東北芸工大で) 学部の2年生だったときに授業でさわったのが最初です。油彩と合わせた混合技法で使ってみてびっくりしたんです。でも……それからやり方がだんだん合わなくなってきた。どうしようかなと思っていた頃に、藝大から出ていた卵テンペラの本を買ってやつ

てみたら、しつくり来て。パネルに麻や綿布を張って石膏を塗って膠で止める、というやり方にしたらうまくいって、今に至ってます。
南 原 じゃあ本当の壁画と同じだ。なかなか定着しないでしょう？
原田 色の使い方がなかなかつかめなくて、今までは制作に手間取っていました。石膏だと絵具がスツとしみこんじゃう感じで、乾くのがものすごく早く。ぼかしたりできないので色やタッチを計画的に考えて進めないといけない。南 原 テンペラは難しいし、手間も時間もかかるし、テンペラ自体の声を聞かないとできない素材。それに比べれば、手取り早いものはたくさんあるのに。
原田 そうなんですけど……以前は鉛筆で描くのが好きだったんですけど、テンペラはその感覚に近かった。にじみやぼかしが全然出なくて、デッサンで使う鉛筆みたいだと思いました。
あと、画材屋さんでできあがっているものを買ってチューブで使うのは楽なんですけど、なんかこう、内容と結びついてこないというか。なるほど。

まつむら・けんぞう
プリヴェ企業再生グループ株式会社
代表取締役社長。他に大阪大学
法科大学院招聘教授、大阪大学
知的財産センター招聘教授、経済
同友会金融市場委員会委員も。来
年、「KENZO松村美術館」を清里
にオープン予定



内なるものが違う！ 不思議な魂が出てくるよう 松村謙二

原田 ……園芸などはされないんですか？
原田 そこらへんに生えているほうが……。勝手に生えてくるほうがいいです。
南 原 描く対象が人であろうと植物であろうと、植物の不思議な素材感をとらえたトータルの仕事として「植物図鑑」と呼んでもいいでしょうね。解剖学も好きでしょ。
原田 ああ……はい！ 解剖学の図鑑とか好きです……描くだけでも満足(笑)。
南 原 ファイレンツェに「スペッコラ」という博物館がある。その中に十七世紀の解剖学の実態を伝えるコーナーがあるんですけど、血管からなにか精巧に作られた蠟人形の人体標本。原田さんが行ったら面白くてたまらないと思う。植物にある「管」は、血管にもイメージが繋がってくるでしょう、むしろ植物というより、そういうイメージへの関心ですよ。植物って

しよう？ めちゃくちゃ好きなんですよ？ 無条件に好きなんだということがわかります。先ほど松村社長が、気持ちよく感想をおっしゃっていて、心からの言葉として伝わってききましたけど、彼女自身も頭で考えて描いているんじゃない、心で描いているというところが、大きな魅力ですね。
ポートフォリオを見る限りでは、ドローイングは難しいことを考えないで自分をリフレッシュするような作業になっています。気に入っている植物は何かあるんですか？
原田 いえ、特に……。描こう、と思える草じゃないと制作が続かない、というくらいです。ただ3〜4年前に比べると、だんだん描けるものも増えたので、選ぶ草の種類も変わってきたかな……。私自身が描くものを選んでいくんじゃない、植物からの視線を感じた私が、植物から引っぱられているんじゃないか、と言ってくれた人がいました。へえっと思いました。
山本 ブドウの生育をよくするためにボルドー地方では畑にクラシック音楽を流しているとか、植物がツルをのぼしてからみつくのは、嗅覚があるためとか、植物には弱電流が流れていて、それで意思を表しているとか——植物はワン



草まわり 2012年 18×14cm
板、石膏地、卵テンペラ

「人も植物も一体となった連なりを象徴的に描いている」と南島氏が絶賛。「人体とその外にあるものに少しリンクするものを感じて描いたものです(原田)」



作家によるドローイングの数々。人の血管とカエルの卵との間に感じた生命の共感、植物も人も同じ根で繋がっている実感……人の理とは異次元の、もっと大きな視点から捉えられた自在なイメージに、現場の一同は興味津々で見入っていた



ちょっと似ています。草はいっぱい生えていてほとんど一緒なんですけど、ただ描かなければいけない、というものがあって。人を選ぶ時もそんな感じで。南島 基準がよくわからない(笑)。

——たしかに(笑)。そう

いったモデル探しも含め、取材、スケッチ、下絵、タブロー制作と、作品のプロセスはいろいろありますが、どの段階がいちばん楽しいですか。

原田 全部好きです。だから、二紀展などの出品の時は「タブローを出す」と限定されるのがモヤモヤして困るんです。スケッチも、ドローイングもすごく好きだし、全部作品として出したいけど、今はあれしか出せない。

南島 本来は全部出さずかまわないと思うんだけど、出す場所とタイミングは大事ですね。原田さんは今、いくつかのパターンを繰り返しているところなんじゃないかな。ただ、彼女はモチーフが天国であっても地獄であっても同質の絵画として描ける画家だと思うんですね。松村社長が「内なるものが出てきている」と表現したのは、まさにそういう、世界が色分けされる前の状態の純粹なビジョンであることを指した言葉なんですね。

それともうひとつ、ものすごく表面の処理を大事にしていますよね。ある純度まで達しないかな。

原田 ドローイングだとわりとよく使っています。タブローより、ドローイングとかスケッチのほうが、自分の中ではけっこう大切で、最近はずっとドローイングで描くような感じに近づけたいと思っています。

——ところで、作品中でよく描かれている女の子は、ご自身なんですか？

原田 妹です。描くイメージに近いんです。知らない人ががんばって声をかけてモデルを頼んだこともありましたけど……草を選ぶ感覚に

なければ、自分自身を許せないように見える。そういう点に一生懸命になれる意識の高さは、今の画家の中ではかなり稀有だと思います。

人の世の理を超えたものを見つめる

山本 今日の原田さんはちょっと褒められすぎかな(笑)。でも、意外にしっかりしているんだよね。これだけワーワー語りかけられても動じないもんね。見た感じとても小さな子、その子がまた小さな声でぼそぼそ話すから、いつも「大丈夫かなア」と思うんだけど。

松村 松村謙三賞の表彰状を渡す時、「いやあこの子があの絵を描いたんだ！」あまりに幼い感じがしたので、びつくりした。しかし、外見通りでは、ああいう絵はかけないよな！ 精神年齢不詳だね！

南島 彼女は「帰るべき場所」というか、人の価値観を超越した世界の理を見ている人ですよ。

みなみしま・ひろし
美術評論家。第53回ベネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、国際美術評論家連盟理事、全国美術協会常務理事等を歴任。現在、女子美術大学教授。1957年長野県生まれ



人の価値観を超えた

世界の理を見ている人ですよ——南島宏

原田 きっかけとかいうか、自分はおっかなびっくり進んでいるところがあって……。一つひとつの出来事や人との出会いのたびに選択しながら、少しずつ絵をやっているという気持ちで固めてきたように思います。

昭和会展での受賞もその気持ち固めにとつ

て大きな役割を果たしたことと思いますが、あの時はどんな気持ちでしたか。

原田 ええと……修了制作と受験に追われていたので覚えてなくて(苦笑)。

山本 僕は覚えてるよ。昭和会展のあとに皆で喫茶店でお茶を飲んでるときに「(松村謙三賞の)賞金はどうした？ ちゃんとした？」って訊いたら、君はあわてて自分の鞆をごそごそ確かめた。大きなお金を急に受け取ったものだから、びつくりしたんだよね(笑)。

松村 原田さんに限らない話だけど、今後どんな作家になるのか、ということよりも、まず賞が励みになるのであれば応援してあげたいという気持ちがある。そうじゃなければ続けませんよ。賞を作るきっかけは日動画廊さんに頼まれたからだけれど、200万円という価値が、いや「お金」というよりも「賞」ですけども、私の想像以上に励みにもたらえるんだなあ、とおこがましいな、とか思っています。

南島 原田さんは、松村社長がビジネスの現場で鬼の形相で働いているところを植物であらわして描いたらいいんじゃない。(笑)

山本 原田さんの作品は、南島さんが携わっている「ベストセレクション展」(東京都美術館)に二紀会から推薦したので、来年5月にはそれぞれで作品も見られますね。

原田 はい、ありがとうございます。あとその前に、4月には六本木の湘南台ギャラリーで個展をやります。どうぞよろしくお願ひします。